

末黒野

すぐろの



1月号
(通巻893号)

白式部

森清堯

薄紅葉朝の日矢さす池の端
思はざる人の氣遣ひ鳳仙花
法師蟬去り際いつも手際良き
秋桜風の余韻を残しけり
志野碗にたつぷりの酒月今宵
白髪へ手櫛の軽き秋思かな
参道へ濃き影落とし秋の蝶
子蝻螂はや本物の斧さばき
棒立ちの揃ふ一隅曼殊沙華
爽やかや久しぶりなる一万歩
紫に一尋離れ白式部
一切を閉ざす朝霧谿の音

瑞声

木の实落つ

黒滝志麻子
(顧問)

山肌のしめりを抱けり岩桔梗
虫時雨庭にずしりと山の闇
水しぶき羽にたたみて銀やんま
とりどりに摘みて華やぐ草の花
八千草の匂ひて雨の上がりけり
暮れ残るものに水音木の实落つ
露草を分けて朝の測量士
庭手入れ終りし後やちちろ鳴く

甲矢集

配列は音順（月毎の循環）



扇置く

菅野日出子

余生とはあと幾年や扇置く
穂芒へ水玉やどす日照雨かな
露深し向かひの丘の夫の墓
糸のころや無縁となりし墓の数
身に沁むや止むるすべなき骨密度
旅の荷の葉十包昼の虫
閑散の湯島天神初もみぢ
秋澄むや人の気配に寄る真鯉
木犀の道をえらびて句座帰り
家までの坂いくまがり流れ星

野菊の墓

田中臥石

秋の夜の成田煌めく照空灯
蝗佃煮買へり成田の門前屋
息子住む成田に泊りきりぎりす
縄飛びの円弧の中の野紺菊
この道を真つ直ぐに墓野菊群る
一位の実熟れて左千夫の生家庭
菊捧ぐ伊藤左千夫の墓にかな
虫すだく娘の家の冠木門
妻置けり机の上の柿一つ
秋冷の空の輝くタワービル

吾亦紅

森清信子

闇深き杜を震はせ虫しぐれ
蟪蛄の振りあぐる斧身を反りて
流行に乗らぬ暮しや吾亦紅
紺碧にまさる空なし鬼やんま
師の背を追ひつ遅れつ大花野
お品書開くときめき秋の宵
身に適ふ短調の楽秋時雨
胸つまる戦場句集そぞろ寒
影落とし影消しゆけり秋の蝶
大粒を子に残し置き栗の飯

鮎落ちて

石黒興平

薄明りの内視鏡室そぞろ寒
鶏頭や細き格子の火灯窓
とおいつなぞる来し方虫の闇
鮎落ちて水やはらかくなりけり
重さうに軽さうに音木の実落つ
近寄れば灯る記帳所秋彼岸
秋高し牧に牛ゐて羊ゐて
炒飯のパリッと出来ず台風裡
月光に晒す八十路の瘦軀かな
無灯火の自転車のゆく良夜かな

黒葡萄

岡野里子

窓下は虫の浄土や仕舞風呂
一粒の重さすすりぬ黒葡萄
とおいつ捨つる句惜しむ夜長かな
二百十日香煙たつる無縁塚
溜池の青粉の水面赤蜻蛉
中天の満月雲を寄せつけず
街騒を眠らせ今日の月天心
十六夜の月生絹めく雲まとひ
卒塔婆のうねりて鳴りぬ葛嵐
コスモスや撓ひて強き妣なりき

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



月 今村千年

杯に月遊ばせて貴船川
夕日影秋海棠巢の庭となる
夕暮の駆足にて来落穂狩
菩提寺へ石のきざはし曼珠沙華
彼岸花村に少年兵の墓
富有柿茜の空を挽ぎにけり
木々を打つ音や小げらの森となる

秋高し 大川暉美

月の客 太田良一

坂道へ迎へに行かむ居待月
外に出ればわれもひとりの月の客
月白や農婦の畳む山畑
こだまする一茶の里や威銃
山国や城址になびく稲穂波
三匹に増ゆる家族の帰燕かな
百舌鳥鳴いてこだまの里へ帰りけり

破芭蕉

岡田史女

参道へ色を尽くせり曼珠沙華
無患子の実の燦然と閑伽井の辺
秋霖や僧百日の行の池
風音のゆたかに稲絮の乾くかな
汐騒の聞こゆる桜紅葉かな
夜々星の高くなりゆく破芭蕉
伝ひきれぬ思ひは胸に鱗雲

ほうたう

小田嶋野笛

秋遊遠近両用眼鏡かけ
木蔭には木蔭の光赤蜻蛉
ポケットに手を入る癖秋麗
罇飴のたうなす崩れ素堂の忌
手に包む珈琲カップ宵の秋
畳屋の仕事てきぱき銀木屋
紅草の一輪活けて鄙の店

萩の雨

加藤静江

金色に染まる池塘や草もみぢ
名刹の鎮もりにけり萩の雨
白萩に埋めつくさるる古刹かな
実紫雨に磨かれ色深む
あすなるの尖る並木や秋澄めり
行き合ひの空の深さや吾亦紅
松籟やいよよ深まる杜の秋

芙蓉の実

斉藤マキ子

芙蓉の実紙のかるさになりにけり
新涼や句集を包むグラシン紙
秋草の蓼科菊科をひと束ね
高西風やテトラポットは肩を組み
月祀る漂着の地に住み古りて
捨案山子山の鼻梁に日の名残
かくかくと上がる遮断機穂絮とぶ

柿の里

堺昌子

名月をおろがみてふと母の事
甘さうに見えて渋柿柿の里
朝顔や今朝は三つつとひとりごと
我が庭の甘柿数ふ夕まぐれ
湧水に木洩日の綺羅秋深む
堂裏に我を呼ぶかにつづれさせ
稲刈りの済みて広しや学習田

思惟の風

長尾タイ

ぬのこづち日暮の迫る杣の径
捨畑へむくの一群こぼれけり
朽舟に照る月光や寂寞と
銅葺きの錆びし鐘楼虫集く
善し悪しを心の糧に花野行く
ばつたんこ闇の深さを刻みけり
竿の露ひと揺すりする思惟の風

秋の声

高木邦雄

紫紺なる富士を映して水澄めり
灯台の裾の切り岸秋怒濤
蚊の名残叩かず払ふ仏間かな
人を呑み人吐く駅やいわし雲
墨堤をよぎる夕風秋の声
中天や満月凜と雲寄せず
蛇笏忌の甲斐の山並秋時雨

青炎集

森清 堯選



横浜 池乗恵美子

三更の月下推敲虫の闇
我が影の殿となる花野かな
借覧の真砂女の句集虫の夜
名月や疫病なきかの港町
白秋の風に預けて木々の私語
こほろぎの貌蟋蟀の字の見えて

目黒 五十嵐貴子

八千草の満つる伽藍や憂ひ捨て
姉妹みな独り身となり赤のまま
気つ風良き女子衆の焼く秋刀魚かな
天高し白球を待つ外野席
灯火親しわりなき恋の行方追ひ
秋うらら嬰の笑みの輪広ごりぬ

大 網白里

嶮崖に寄する波音秋めける
夫よ吾を忘るる勿れうろこ雲
十六夜や灯の煌煌と塾の窓
色鳥の樹の雨こぼし色こぼし
金色の猫じやらしより夕づきぬ
更けて出る夫追うてゆき荻の声

亀 卦川菊枝

鯛群れ一糸乱れぬ急ターン
遊覧のセスナの一機昼の月
山法師の実の赤玉や秋没日
鰓蓋の尖り鱸の面構へ
小豆選る金婚式の馳走にと
塗箸の先を窄めて苦うるか

相模原 板谷俊武

鯨の潮この地を終の住処とす
黒潮の育む紋や鯛干す
畑中の墓は小高く彼岸花
顧みる昔の恋の花野かな
昼ちろ昭和の残る台所
翻るものみな白し秋の風

東大和 谷口律子

露草を好きと答ふる人近し
曳売りの野菜にまぎれ吾亦紅
枝豆を押しつぶてや口中へ
木犀の香のそこはかとふり返り
人の世の狂ひをよそに月今宵
魚店に泳ぐが如し太刀の魚

横浜 田中春江

久方の日を全身や障子干す
元禄を祖の過去帳や秋灯下
青き空晩稲田を守る擬似鳥
糶田や農具手入れの男達
音に立ち風に戻りぬ稻雀
仏手柑の誘ふ夕日檀那寺

横浜 岩上行雄

秋雷の耳をはなれず浅眠り
秋風鈴呼び込む風のかるさかな
鴉の声一山の昼ひきしめて
秋晴や胸ポケットのペンを執り
身に入むや上掛けのまたずり落ちて
里山路足裏捕ふる暮の秋

横浜 宮元陽子

あの事を言ひかけ畳む秋扇
堀ぎはの横一列や鶏頭花
一面に散り敷く木槿なほ一花
秋日和写真の裏の覚書
転のなく生きて結へと桐の秋
斎場を出づるや低く秋夕焼

横浜 饗庭恵子

ざわざわと種騒ぎ出す秋野かな
秋晴や絵馬の一枚裏返し
つくつくし寂しきときは饒舌に
み空見て海見る二人秋夕焼
かなかなや息切れ切れに東慶寺
玻璃戸より過ぐる影あり秋の蜂

耕 土 集

岡野 里子



面倒なる背中のボタン秋暑し
満月の散歩の友となりにけり
母の指へマニキュアをぬり秋うらら
灯火親し眼鏡にルーペ重ねをり
師も弟子も後る鉢巻松手入れ

横浜 大庭美智代

土手に溢れ谿に溢れて曼珠沙華
長き夜やルーペの中の字を拾ひ
芋畑忘れスコップ鏝始む
耳掻きの綿毛ふんはり冬ぬくし
金木犀目印として歯科医院

町田 中野千代子

曼珠沙華花の赤さよ儂さよ
唐臼の響く小鹿田や水の秋
中秋や離るる友と愛づる月
萱草くや老いも総出の谷戸の里
この梨は横浜育ち瑞瑞し

横浜 久島しんの

白波や兎跳ぶかに秋の海
池の面を風のごとくに赤蜻蛉
ハイヒール颯爽と行く秋の朝
満月を夫と賞づるは幾度ぞ
見はるかす水平線や小鳥来る

横浜 秋山 文子

野毛山や団栗青き汀女の忌
乱れ萩雫留むる路地の朝
袖へ風一休さんの案山子立つ
銀杏の実零れ築山黄に染めり
シャガールの青に浮かびぬ夜半の月

横浜 宮之原隆雄

青みかん硬きの香る爪の先
敬老日ちよつと派手めの杖買うて
木犀や香の淀みをる雨もよひ
終活の転居通知や鳥渡る
街道の俄出店や柿日和

横浜 喜田 君江

堂裏の小さき石仏こぼれ萩
秋草や木道よぎる風一陣
湿原を飛ぶもの数多沢枯梗
夕照や裾煌々と芒原
旅果ての車窓へしづく山紅葉

葉山 伊藤 美緒

部屋部屋を追ひて廻るや名残の蚊
線香や工事現場の蚊の名残
天高しくレーンの吊る柱の香
すれ違ふ萩のトンネル肩すばめ
柴漬に楊枝を刺して月見かな

川崎 木村 純子

花栴檀山の斜面を風渡る
刈り残る墓への道や捨子花
ぐつぐつと煮ゆる南瓜や子へ小言
秋茄子や紫紺宜しき香の物
柿食へば妣の笑顔がそこにあり

仙台 守谷 紀栄

仰ぎ見る空の青さや赤蜻蛉
柿の実の葉裏かくれに色づきぬ
レッグウォーマー孫より届く敬老日
重陽の日差し畳に濃かりけり
ほっそりと少女の如き初秋刀魚

横浜 鈴木千恵子

古寺の道や木の間の空澄みて
人気なき里のコスモス朽ちる家
谷戸の家のそれぞれの灯や秋の暮
木漏れ日の織なす艶や柿紅葉
秋高し瑠璃の岩場の城ヶ島

横浜 西 計郎

一湾の出船入船秋の昼
秋空を回す風車や氷川丸
薄差す花瓶の絵柄山ぶだう
旋回の鳶の斑や秋の空
飯つぶを争ふ鳩や秋うらら

横浜 平田 きみ

楽しみを数へて待つや青き柿
むかご飯土の香りの湯気流れ
祖師堂の読経の長し曼珠沙華
黄緑の葡萄重たし陽の零る
皮囓めば苦き思ひ出黒葡萄

横浜 内山 みち

園児らのまろめる団子望の月
黄葉や奥入瀬川に跳ぶひかり
秋の日や旅の終りの露天風呂
滝しぶき浴びて奥入瀬秋日和
単線の音の残りぬ彼岸花

横浜 平野 秀子